

## ミルトンにおける「男」と「女」

植 木 敏 一

苦闘していたミルトンが、詩から一とき離れたパンフレット時代（1641—1660）を通じて、宗教論、政治論、離婚論を三つの柱として、英国議會を相手として論争を続けた時代にスポットをあてて、ミルトン著作に現われた「男」と「女」との根本理念を眺めたいと思う。これら一連の冊子は束縛された自由を市民の手にとりもどすのがその根本的動機であり、冊子活動の激烈さを促すことになったのである。ミルトンの主張する自由については、すでに書いたこともあるので、詳細をさけてただ補足的な意味において、ギリシャ、ローマにさかのぼることとする。すでに知られたことではあるが、ギリシャでは、上流階級においては、男がすべての権利を専有し、女は財産を処分する自由を絶対許されなかった。また中産階級においては、女は極めて若い年齢で結婚する風習があり、一度結婚してしまえば、女たちの生活は徹底的に制限を受け、大概は家に閉じこもり子供を産むことと、衣類をつくることと、家政を守る義務が課されて自由の時間はなかった。しかし、女たちはすべて信仰生活に参加し、国家のことにも参加したが、政治的権利は与えられず、女としては働くべきではないとの社会的拘束をうけていた上流階級、また中産階級の男女たちが心に抱いていた貴族崇拜——ミルトンにもこの伝統は流れこんでいたが——がむしろ女たちにとっては心の負担でもあった。男と結婚したからには法律的行動とか、法廷における証言もなし得ず、敢えてこういった行動に出ようとすれば、離婚する以外にないという自由への大きな障壁が女たちの前に立ちふさがっていた。性格の不一致なんてとんでもないことだった。娘たちは市民の習慣の必須条件として結婚しなければならぬという考え方が一つの束縛として、上流階級および中産階級のなかには力強く支配していた。そのためには、娘たちを過度にまで保護しなければならぬ両親は純潔（chastity）を重要視することを怠らなかった。彼がこの純潔を古典で読んでいたときに、彼の心をひき「コウマス」の中心テーマにもなったのだと考えられる。一方、貧民階級の娘たち或は未亡人たちは労働によって生活費をつくるのが先決問題となっていた。これらの女たちは非市民とか奴隷となったり、または囲われの女——法律では認められた階級であったが——は高度の教養を持ちながら、高級売春婦となったり、あらゆる集会におけるホステスとして日常の糧を得ることに懸命であった。勿論結婚もすることもあるにはあったが、上中流階級の女たちに比してその同棲期間は短かった。特に下層階級の女たちには、必要であろうがなかろうが、性に対する意識とか、性の神聖感は皆無であったといってもよいだろう。このようにして、文化の発展とともに、人間としての意識が次第に高まるに従って、性もおのずから、解放といおうか、また結果的には放埒へとむかってきたことは何れの時代においても自然の理であろう。

また、ギリシャの哲学者とミルトンと最も密着性の高いプラトンとアリストテレスとをとりあげてみても、前者はギリシャ社会における家族をその中心から不法にもとりあげることを断念したし、これに反して後者は家族を基本的な単位概念として思考した。しか

## ミルトンにおける「男」と「女」

し、両哲学者は男と女は同じ教育と同じ躰を受ける権利があるものと考えた。即ちミルトンの平等思想と偶然二重写しとなっているのである。特にプラトンは、女を保護されるべき人と認めていたことは、後者と著しい特異点となっている。この思考方法は、「コウマス」にも、「失樂園」にもエコーが多分に認められる。勿論聖書を度外視することはできないことを付言しておきたい。プラトンはまた家族と男の関係について規整をなしたが、犬儒学派は両者と異なり家族生活を考慮の外においた。また、ストア哲学者は、特に女に対して男との関係を平等にまでその思想を確立していた。

ところが、ローマ時代になって、女には財産の所有は許されたが、女が経済的にもまた宗教法による離婚が極めて困難であるようになって——異教信仰のみは離婚の唯一の理由ではあったが——弱い女の地位は保護を受けていたので、女は保護者をもっていなければならない状態にあった。上流階級の女は教育をうけそのうえ賢明であり、女のなかには権力をもとめるものもあって、概して女は男よりも有力であった。一方、中流階級と下層階級の女たちは、ギリシャ時代の女たちとは殆んど大差なかったと想像される。高級売春婦も存在していたであろうし、性の乱倫は、何れの時代において、いろいろの形を変えて見られるけれども、この時代には家長制の崩壊によって市民階級の女たちは自由を獲得したが、結婚の神聖に対する概念は堅持されず、むしろ、性の勃発といおうか、性の無軌道は庶民の眼には日常茶飯事のこととして写っていたようであった。

ところが、イタリアのルネッサンス期は、哲学的には、アリストテレスよりもむしろプラトン主義の方に、一般人は勿論ミルトンの心も斜傾してきておった。そもそも、プラトン主義という思想はいわば形而上学的理念のアレゴリイとしてうけとめられていた。いいかえれば、天球の調和——ミルトンも多分にその影響を受けているが——のとれた状態において男と女の愛を見て、哲学者たちには恐らく考えられていたであろうように、人間における下等な官能性を永遠に高めることが人間の愛の本質と考えられていた。従って、愛とはこの下等なる官能性を斥け、純粋なる精神の眼で永遠の美を凝視すべきであるという思考が中心となり、女の美は神の理想が産み出した美の一種の反映であるとも考えられた。この時代は、ギリシャ、ローマの時代とは異って、一語では言い尽せないほどの複雑性のために解明が困難であろう。一般的に言えば、人間性の解放と現実世界への目覚めであろうが、他面世界の終末という不安感が付き纏い、この時代の生活から逃避しようとするのが、いわゆる、多義的な意味を持つ語であろうヒューマニストたちであり、彼等は人間の完全な発達こそ最高の目的であったが、その人達は数において少数であったことは想像されるのである。従って、この人達が、意識すると否とにかかわらず、貴族主義の色合を帯びてくるのである。このために、ミルトンの父は多少の財産をもっていたために、ミルトンが貴族的であるといわれることにもなるのである。そして、彼等の思想は、完全なる調和と哲学的平和という思考の結果を生じてくるのである。しかし、これは後にのべるミルトンのプロテスタントの調和とイタリア・ルネッサンスの調和について、塩野氏の言葉をここに借用して後述のミルトンの調和精神の繋ぎとしよう。

「イタリア・ルネッサンスには、プロテスタント的な見解、つまり精神的なものとの肉体的なものとの葛藤などは存在しない。精神と肉体との間に葛藤などという混濁した甘い関係はなかった。それはあくまでも、この両者を分けて考えたから人文主義の伝統をもたなかった北方プロテスタント的な見解であって、サヴォナローラが誇張したと評価されたり、当方の法主たちが墮落の一言で片づけられる一つの理由もここにある。イタリアでは

## ミルトンにおける「男」と「女」

この二つのものが、人間の中に調和を保って共存していた。言いかえればイタリア・ルネッサンスの真髄は、狭い精神主義の殻に閉じこもることのない大胆不敵な魂と冷徹な合理精神にある。この上に立った二つのものの感覚的で官能的な調和。これを感じとらない限り、イタリア・ルネッサンスの心情を理解することはできないであろう。」<sup>(4)</sup>

さて、すべての古典文学（ミルトンを含めてだが）は、前時代の文学遺産が何らの形をとってその文学者の作品のなかに芽をふき、想像力と空想力がこれを消化して一つの作品を産み出すものである。ミルトンの作品についていえば、ヘレニズムとヘブライズムとが適度に混合していることは一般の常識になっている。従って、彼が彼の作品を高度な世界文学にまで昇華せしめたのは、もちろんギリシャ、ローマの古典を読破したことにあり、イタリアの文化を直接間接に探究したことにあり、そしてこれらを咀嚼した彼の文学的才能の所産である。これについては、T.S. エリオットの伝統主義理論をもって考えれば理解できようし、或は西田幾多郎博士全集中の『伝統主義』によって理解を深めることができよう。

「男」と「女」として最も重要な要件は人間としての愛である。愛こそもっとも神聖であり、至高の到達点でもある。これに反して、最も悲しむべきことは愛の破綻、すなわち離婚の問題である。「男」と「女」とのこの愛<sup>(5)</sup>はすべての愛情のうちでは最も強力なものであり、愛は家庭生活の合理的な基礎として神は祝福し、これをもって人間の理性と権威の二つの外的な印とした。このことに関係して何れの詩人も、愛の実体を描いた「失樂園」には心酔せざるを得なかったといわれる。

さて、「男」とはいかなるものか。それは「男」としての義務と関聯して考えると、「男」たるべき存在理由が明かになるのである。その根元をなすものが「徳」であり、これが外的利点を規正するもので、肉体的満足あるいは人生を豊かに飾るものと言えるのである。「失樂園」のなかのアダムは「神の最近につくった男のなかでは最もよきものであり」（P.L. 4. 323）であり、アダムは「神の最近の姿を写した男」（P.L. 4. 565）であり、「神は男に神と同じ愛を注いだもの」（P.L. 8. 228）としている。神から言えば、最高の美人イヴに配するに、最高に逞しい「男」を配したものである。この「男」と「女」とが平和な結婚を神の命に従って、大過なく過したとすれば、このような偉大なる叙事詩は構成されなかったかもしれないが、不幸にも誘惑という動因があって、「男」が「男から出たその名前は女」（P.L. 8. 497）としての「女」をしっかりと守り、ギリシャ、ローマ以来の男性上位として事を処しながら、困苦を乗り切っていく、また「女」を奴隷視せず、手に手をとって、再び樂園への復帰を願った「男」を描いたミルトンは、その反面「男」としての資格にも厳格であった。

いま、ミルトンが羅列している「男」の条件<sup>(6)</sup>を簡単にあげてみると、

1. 節制。これは肉体的満足欲を規正する徳であって、節制、非情熱的合理性、純潔、適度、品位を含む。
2. 節度。これは飲食を節制するが如きもので、この徳の反対が酩酊と大食であり、愛に当てはめると過度の眠りの愛、情欲である。
3. 純潔。無秩序な性欲とは正反対な愛で、純潔は「聖別」と同意語である。純潔の反対は不純潔である。細別すれば、柔弱、男色、獣欲になる。

\*（ギリシャ時代の伝統をひくものであることはすでに述べた。）

4. 謙遜。言語あるいは行動のすべての猥せつを禁止することにある。性および人に関

## ミルトンにおける「男」と「女」

して行動する最も厳格な品位である。「女の行儀作法についての同じ考えが異邦人のなかにさえあった。

5. 品位。服装とか外見における無作法あるいは挑発を慎むことである。一時的所有に対する喜悦における適度性は、満足、節約、勤勉、自由精神の諸徳に表出されるものである。
6. 雅量。富その他の諸利益、名誉を求めたり或は斥けたりするときに我々の品位に対する尊重によってくるものである。
7. 剛勇。悪を斥け、心の平静をもって、悪の接近を見うることに、主として顕著にまで、目に写つるものである。この大いなる型はイエス・キリストである。その反対は臆病あり、軽率である。
8. 忍耐。不幸、侮辱に耐えしのおぶことである。その償いは、信仰ある人によってのみ見られるのである。

であって、「男」が男自身に対して、特別なる徳の第一級のものとして以上のようにあげている。

一方「女」については、論集第四号において一部ふれたことでもあるし、ここでは表題が「女」であるために、この論文において重複する恐れもあるかもしれないが、前に言い足らざる分を再び補いながら述べることにする。大前提として、「女」はあくまで「男」の配偶者であり、また「男」を慰めるひとであり、「男」よりも劣るものである。時には悪徳を有するものもあり、時には美德をもつものもある。そして、「女」は「男」に対して服従の関係に立つものであり、また「男」と同等である場合もある。ミルトンは「女」を賛美し、「女」の美を礼賛することもあり、あるいは騎士道的精神をもって対することもある。これはギリシャ、ローマの時代、また英国の中世、ルネッサンスの時代の伝統を受けついだものであり、実際のキリスト者としての生活のなかにも見られるのだから、特に不思議に感じるものでもない。「女」は人間墮落に対して重大なる責任を負荷したこともなり、また世に「女」は、「男」より劣るという概念は、力の点においては当然であろうが、しかしこのように自然の劣者としてよりは、むしろ劣った教育の犠牲者としての「女」は、平等な教育の祈りによって補足されている感がある。もともと、「男」と「女」とは神の恩寵においては同等で、「男」の道徳的弱さはあたかも「女」の肉体的弱さの如きものだという解釈もなしえるであろう。「女」というものは、「男」に対して、互に矛盾する二つの感情をもつ精神状態にあるもので、心理学的には両面価値をもつと考えていたようだ。

ところで、「男」と「女」は、ミルトンの作品のなかでは、その中心たるべき愛が色々の形をとって表現されている。「男」と「女」はキリスト教においては永久に愛さなければならぬことを教えている。しかし、カトリックにおいても、プロテスタントにおいても誓いあった愛にも破綻、つまり離婚が認められているのである。それには、ある条件が前提となる。それは、主として異教信仰へ走った場合に限るのである。ところが、ミルトンの言う結婚とか離婚とかいう概念は、花々しい論争にもかかわらず、ピューリタンとアングリカンの間に差異が認められるほどに、絶対的特異なものではないのである。しかるに、なぜミルトンは次のような離婚論を冊子として出版したのであろうか。この論文の土台となっているその冊子とは、

### 1. The Doctrine and Discipline of Divorce (1643)

2. The Judgment of Martin Bucer (1644)
3. Tetrachordon (1645)
4. Colasterion (1645)

であって、H. Belloc<sup>(4)</sup>によれば、

「この離婚論は、余りにも多くの場所において馬鹿々々しいほどに用語が粗雑であったが、そのちょっぴり表面にあらわれる猥せつ性は、ただ衝撃を与えたり営業を目的とするため、今日小説を書かせる精神の現代の下品な露見からは前進していなかった。」

とまで毒舌をはかせたのは、彼がカトリックの文士であったといえども、英国歴史上危機存亡のときに、ミルトンを大詩人としてまた英国に深大な影響を与えた文士としては軽挙妄動とは考えたが、心の底では尊敬の念は不動であったであろうと思う。ジェームズ一世の賢明なるも政治の不手際、宗教界の確執、一般大衆の国家への無関心、道徳の低下などを背景として、ミルトンのパンフレット著作者としての評価は正鵠を得ていると思われる。また、これらの冊子にミルトンが署名をしなかったということも無責任といえ言えるであろう。これらの冊子は、内容については論旨上の差異はあるとしても、いづれにもその基底には結局「自由」の思想が置かれていることが特長であるとともに、退屈を感じさせ、この時期において詩人としての空白とうけとられる。宗教的に言えば、カトリックとユニテリアンとの反目でもあり、換言すれば、偏狭なアングリカンと偏狭なプロテスタントとの衝突であり、また宗教ファシズムと自由主義との主導権争奪闘争でもあり、表面的意味においては英国議会の離婚法に対する反対であり、聖書の法に対する反撓であり、結局は、自由の擁護であり、民衆の手への奪還である。また言葉を変えれば、人間の自由意志の濫用に対する聖なる反抗でもある。これについて、古い時代を眺めるならば、モーゼ、ジョシアの時代からの遺風となっていたものである。離婚を一切認めずとした議会の圧政に対する反抗、離婚法に対する反撓、制度に対する撤廃要求でもあった。そもそも、ミルトンの心のなかには、社会生活の福祉に欠くべからざる三つの自由、即ち宗教の自由、家庭の自由、市民の自由があって、いづれも当時の議会政治とは深い関係をもっていた。そのうち家庭の自由とは、結婚の成立、子女の教育、思想の自由とに分けて考えられるのであって、ミルトンが1642年王党派の派手な生活環境に育った Mary Powell と結婚して、家庭環境の相違が禍いとなって彼女が実家に帰ったが、1645年ミルトンとの和解が成立した事実があるが、この事件を離婚論の執筆の直接動機とみる学説には同意しかねるのである。彼はその時代の政治家たちの無為無策と失政と国民道徳の頹廢に対して愛想をつかし、軽蔑もしていたであろうし、また第一の妻との離婚の不愉快さも心には潜在していたであろうが、最後には離婚した妻と和解も成立し家庭生活も正常の状態に戻ったことから判断して、単一性の原因よりも複合性の動機に対する見解の方を考慮するのがいいのではないかと考えるのである。あたかも「サムソン」を自叙伝的ドラマと考えないのと同様である。再びいえば、ミルトンは、議会、国家が離婚を禁止しようとする法の成立に対しての見解をただ単に宗教上のものとしこの見解をとり、神の禁令ではないとするのである。これはギリシャ、ローマ以後ルネッサンスにおけると同様に、複合性の理由を背景にして、人間性の尊重にも通じるのである。

さて、離婚なるものは、人間自由の思想から発しているのであるが、一つの感情的突発からくる論争であり、ミルトンが第一の妻 Mary、第二の妻 Katherine Woodcock と結婚、病死、1661年第三の妻 Elizabeth Minshull と結婚したが、その後の平和な家庭生活

## ミルトンにおける「男」と「女」

をみても、決して不幸どころでなく、経済的にも恵まれていたのであるから、大体幸福な生活をおくっていたと思われる。従って、「男」と「女」とが結びつく愛とか結婚については、離婚論の内容ほどには偏狭な思考はなく、キリスト者として正当な落ちついた態度をとっている。

「男」も「女」も、人間は極めてすぐれた神の創造物であることは人間の誇りである。また他の動物とはちがって、精神の慰藉と満足が五体の感覚上の歓喜より重ぜられるのである。これが結婚によって得られるのである。また神からいえば、人間の結婚は神からの偉大なる祝福であり、名誉でもある。結婚は神聖であり、それ自体が高遠な目的でもある。なぜこのようにモーゼが律法をつくったのかといえ、人間がともすれば、悪の発生がおこりこれを医さんがため、人間が神の神慮を誤解して悪のなかに閉じこめられぬような深い恵みを示すものだとミルトンは考えるのである。それ故に当時としては、人びとが結婚を急いだのは怪しむに足らぬものである。ところが、粗野な愛情が悲しむべき離婚をひきおこしている事例は多かったのである。ミルトンによれば、結婚はただ単に欲情(lust)の衝動でもなく、感覚上の欲求の単なる刺戟でもない。離婚するのを禁止されていることは、実際結婚することも禁止されているということにも符合することであり、言葉を変えていえば、独身者よりも多大なる難儀の状態に置かれる、いやその難儀を強いられているのではないかというのがミルトンの論争の拠点であるが、実に激烈な切り込みかたではあるが、モーゼの説くところと類似していることに注目しなければならぬ。結婚とは、一つの契約であり、強いられた同棲や似而非の義務の遂行に存しないで、銜いのない愛と平和に存する実体であり、換言すれば、愛であり、心である<sup>(9)</sup>。結婚愛は相互でない限り育てあげられることはなく、また結婚生活の存在もあり得ないことになる。また、ミルトンによれば、モーゼの健全な努力も許されるべきであるとの配慮がなされたのであるが、これがキリスト教徒において拒否されなければならないのか。また英国キリスト教徒はなんと自己流の解釈をくださったのであろうかと憤然として抗議をする。そもそも、教会においての律法の成立——離婚法をさすのだが——はキリストの教えにも等しいものであり、平和にのっとなって審議されるものであるのだが、これがミルトンの考えとは全く裏目の結果を生じたということに対する怒りでもある。再び言うのだが、結婚とは契約であるとすれば、これを忠実に遵奉することは、外見のみを繕う結婚を継続することになり、これは絶対許されるべきことではなく、結婚においても、離婚においても、平和と愛とにその基盤をおくということこそ、結婚に対する被害を最も少くくい止めることであった。彼の「愛のみがあらゆる神の命令を完全に行うこと」であるというのがその根本思想である。離婚をしなくてもよいことについて、人びとが知らねばならぬ二つのことがある。一つは、不信心の妻は夫によって浄められるために、「女」の不信仰によって汚されるのを恐れて離婚する必要はないのである。また他の一つは、誘惑を回避することにある。従って、正しい信仰を持つ「男」であれば、偶像崇拜の異教徒の「女」とは離婚すべきである。ところで、離婚するかしないかは、信仰ある「男」の二者択一にまかされているのである。偶像崇拜と不義とは何れが結婚最大の破壊であろうか。ミルトンによれば、偶像崇拜は直接に危険を及ぼしはしないのである。ところが、不義は結婚上許しがたいものである。このような意見は荒蕪粗野なる意見と彼は考えるのである。そして、これらを禁止したのは、見せかけの形式本位を一步もゆずらず、これを守り通そうとするのが狙いであろう。これは人間性を守ろうとする側と、人間性を軽視しようとする側の意見の対立であ

## ミルトンにおける「男」と「女」

り、神そのものを無視しての論争と考えるはどうだろうか。

元来、「男」と「女」とのことについて、かくあるべきだと訓えているのは、聖書、ローマ法、キャノン法、一般祈祷書であり、そのなかにある当該項目については、生殖、悪徳の忌避、「男」と「女」の結婚による慰めの問題であった。敷衍すれば、ギリシャの都市国家のそれと似ているように、人間の生殖であり、国家の基礎たるべき家族の建設であり、教会の普及であった。「男」と「女」とが結婚して、そこに調和を保つためには、「女」即ち妻が自身の役割および義務に適合し、家族の慰めの中心となつてこそ、社会、国家の健全性と安全性が確立するのである。ミルトンが宗教的に不浄（uncleanness）というのは、「男」から心が離反して、言いかえれば、愛と平和の義務からの不服従と依怙地なのである。その愛と家庭生活の合理的な基礎とし、ミルトンは肝要なものとして、その愛が人間の理性と権威の外に現われるものとして考え、詩のなかでの詩材として愛の発展たるべき「失樂園」第四巻にも、この思想を表現している。彼はまた結婚についても象徴的に愛の重要性を展開している。樂園はそれ自身樂園であろうけれども、その樂園にミルトンは、結婚と関聯して官能性と稜序の存在性というものを象徴的に思考し、詩の創作構成を行っている。「失樂園」の大部分——言いすぎであるかも知れないが——において自然をその背景に置いたのも、それと並列させて結婚の理想をも象徴しているのではないかと想像される<sup>(6)</sup>。自然が「男」のヒューマニティと理性、意志、情緒、性欲が適当に調和させて運営されているということも想像される。この状態において、「男」と「女」が人間として最高の幸福を嘯み締めているのではなからうかとも思えるのである。しかし、愛情——相互的な愛——が調和され、結合されて、彼の最も満足しているだろうと思われる部分についていえば、「失樂園」五巻のなかで、アダムとイヴの愛の言葉が、この理論の概要を物語っているともいえるのである。この愛情こそ、アダムがイヴに対して精神的な勇気と結婚への助けを韻文化しているが、このなかではミルトンは、夢形式をとって「男」と「女」の人間を追求している。ミルトン即ちサタンという学説に従えば、サタンがイヴを鼓吹した夢であり、虚栄、好奇心、野望に対する訴えのなかで、誘惑の実際の場面を予見せしめた夢でもある。この夢を分析すると、野心は自尊心——思い上りといってもよいが——のように、それが昇りたいと思うときには落ちるといふ不合理であるようだが、実際は正しいのである。すると、アダムはイヴに対して「貴女は誤っているのだ。」と自信をもって言い、また続けて理性、空想、感覚の体系を説明するのである。そして、意志、即ち自由意志のみが罪をつくることありうる事実をも説明する「失樂園」の読みどころである。このような説明は、道徳的意味において妻を支持するものとして、アダムの結婚の役割を果たしたことになる。また、アダムの理解と確信は、罪を犯したことを絶えず怖れ戦く<sup>おのの</sup>イヴに対して勇気を与える。このなかで、「男」の力とその必要性、これに反しての「女」の弱さと多産を象徴しているといえるであろう。この場合「男」の悲境は隠すべきもないであろう。

「おお、貴男、貴男のために、貴男から、貴男の肉から、肉をつくられましたので、貴男がなければ、私はなんの生甲斐がありませんか。私の導き手！ 私の頭よ！」

(P. L. 4. 440—43)

とイヴの答える姿は、シェイクスピアのハムレットの「弱きものよ、汝の名は女なり。」の台詞と同じように弱さがあるが、弱さの概念において根本的に発想的差異が認められるのである。創世記に示され書かれている「男」と「女」はただ単に結婚における両性の序列

## ミルトンにおける「男」と「女」

を提示したに過ぎない。イヴのことばによれば、「女」は「男」のためにつくられたものであるが、それを拠点として、イヴは私は「男」のためにつくられたものであり、貴男なしにはなんの生甲斐がありませんとか、私と貴男とは同じではないことが台詞のなかで、創世紀のエコーを響かせ「それほどの男女の差異によって、まされども」(P. L. 4. 447)という表現をとっている。これは一見キリスト者にとっては陳腐なことではあろうが、この考えが、離婚論の出発点ともなり、伝統的なキリスト教的見解の肝要なる繰返しと解せられることもある。ミルトンは知性とその知性を駆使する力の点には「男」と「女」とには相違があるのは勿論とするが、ここに「男」の権威へと発展するのである。ルネッサンス期にはアダム物語が大いに流行したし、男尊女卑の風潮もあり、上流中流下層とも「女」は殆んど「男」に頼ることがなければ、生きられない時代でもあったので、このことについては聖書をその背景として全く無視することは不可能であろう。そして、アダムが神の姿であるように、イヴはアダムの姿でもある。(P. L. 4. 471—72) つづいて、イヴの言葉を聴こう。「神は貴男の掟、貴男様はわたしの掟。その上、それ以上知らないのは女の最上の知識であり、また女の名誉なのです。」と言っているが、最後にイヴの話によって、サタンはアダムの愛がいかなるものであるかを知るのである。その叙事詩のながで、ミルトンは肋骨のことを繰返すが、これもミルトンの心のなかでは、結合、親愛、愛情、平等の意味を含めての愛という大きな建造物をつくりあげているということは、「男」と「女」の愛をキリスト教的な見解を拡大解釈したにちがいないであろう。

従って、ミルトンの愛の概念は、純粹であり、名譽あるものであるために、「男」と「女」の結合である結婚も同様の意味に解せられていいのである。結婚とは、神の創造的意志を遂行する命令と見なされ、愛の適性な領分とも考えられ、ミルトンが四つの冊子からなる離婚論で説明したように必然的な結合であるとし、その彼の根本的理論をただ瞥見した場合には、離婚をむしろ自画自賛したように考えられる恐れがあるが、愛はそうさせない強い絆なのである。また、彼は「コウマス」において愛のない結婚を責めたように愛のない性を非難したことも「失樂園」から思い出すことができよう。また「男」と「女」との結合即ち結婚は自然の理想でもあり、「男」と「女」の人間として十分な人間性と、理性と、意志と、性欲とが調和して働くことをも意味しているのである。

敷衍すると、「男」と「女」との結びつき即ち結婚には精神的な結合が優先し、重要性がここにあり、結婚式とは外的な一種の符合に過ぎないと考えられる。しからば、肉体的結合についての解釈とは、「徳」と「人間性」に基づくのである。ミルトンが与える結婚の定義とか、「女」の概念とか、結婚の状態についての考え方とか、理想の結婚とかいったものは、キリスト教の教義を中心軸として考えられているために、彼の理論は相互的に補足しあって明かにしようとする試みが発見できるのである。従って結婚における肉体的交渉については、二つの「離婚論」と「失樂園」のなかでは薄明のなかに包まれている状態にしておくようだが、おそらく意識的に触れなかったであろう。といっても、Bellocの指摘するように「失樂園」のなかでも性交を賛美しているように思わせるところもなきにしもあらずだが、絶対的に第一義の意味をもつものであると考えていいものであるかどうか。その理由は、「失樂園」のなかで展開されるアダムとイヴの結婚と愛情——彼の考える理想の結婚は性交のために美を根底からくつがえすことはなかろうと思われるからである。

再び言うが、「男」と「女」との間には生成についての差異があり、この差異に基づく権



## ミルトンにおける「男」と「女」

利のなかにも基本的相違があり、この相違は「失樂園」のなかにも主張されている。「失樂園」の「男」と「女」との間には知性が同じではないと同様に、家庭の思慮性、相互扶助、権威、従順、愛情能力においても同じではない。それにもかかわらず、両人は理想的な人間の型として、いいかえれば、理想的な「男」と「女」として、現代英国の社会においてのみならず、現代日本の社会においても、我々に示唆を与えるところが多少あるであろう。このような考え方の欠如した社会のなかに離婚の原因が多少なりとも潜在しているのではなかろうか。「男」と「女」のには根本的な差異があることと、人間の墮落と相対的位置にある人間の救済という問題として前方へ押し出してゆき、結婚がどのような意義をもつものであるかを、聖書の原点に立ち戻って、自分の態度を世に強く示したことにその意義をみとめたいとも考えるのである。なぜ離婚というのは不幸であろうか。当時においてこれを要求するのは「男」の側にあって、「男」の第一次義的な個人の権利でもあり、この間の理論を押しすすめるために、「男」と「女」の間の相違という根本原理を活用したにすぎない。再び繰返すが、彼は離婚を積極的に薦めたものではなく、アダムとイヴの女男の、人間の、幸福の追求が彼の最後の願望、祈りである。また、その人間の幸福は相互関係と順序の上に立っていることも忘れてはならぬものであろう。

最後に、教会の内紛へ体当り的な意味で「離婚論」の冊子を書き、自由を再びわが手にとりもどそうと努力し、当時理性について無関心であった人びとに喚起させようとしようと試みたが、結局運動としても、彼は予期したほどの効果は得なかったのではなかろうか。カトリック時代より続いて固定化された離婚問題に立ち向ったことは彼の同志ピューリタンたちに大きな驚きを与えたことは事実であったであろうが、事実は事実だけであって、ミルトンの全作品のすべてを通じて、冊子時代は彼としては一時期の文学的沙漠の出現に終わってしまったとも言えるであろうし、また失敗であったとも言えるであろう。率直に言って、この失敗は失敗だとしても、こういった根本理念が礎となって、「失樂園」において、世界文学としての美しい花を開かせたことは、詩人としてのミルトンの当然の結果であろうと思うのである。

## 参 考 文 献

- (1) 塩野七生、「ルネッサンスの女たち」中央公論社 昭和44年 p.47—8
- (2) *The Christian Doctrine, Student Milton*, Appleton Century Crofts. p.1066
- (3) *Ibid.*, p.1064
- (4) Hilaire Belloc; *Milton*, Cassell, 1971. p.146
- (5) *Ibid.*, p.156
- (6) James D. Simmonds; *Milton Studies, volume III*, 1971 のなかに G. Stanley Koehler; *Milton's Use of Color and Light* の一篇がある。執筆後に届いたために参考にすることができなかった。